

教室外の世界で行われている「評価」

- その多様性を探る意義 -

宇佐美 洋（国立国語研究所）

1. はじめに

従来、言語教育の分野において「評価」とは、「教師のように権力を持つ者が、権力を持たない学習者の能力や言語行動を一方的に値踏みすること」「学習者の能力や言語行動を、点数・成績のような形で数値化し、一次元的なスケールのどこかにプロットすること」としてとらえられることが多かった。こうした評価の結果は、被評価者の人生に対し少なからぬ影響を与えてしまう (high-stake) 可能性が高いために、言語教育における評価研究は、教師が信頼性・妥当性の確保された、公正な評価を行うためには何が必要か、というところに主眼が置かれていた。

しかし、そのように high-stake な評価だけが評価ではない。ここでわれわれは、「評価」の最も広義の定義として、

対象について何らかの情報を収集し、それに対し、評価者の解釈を通して判断を行うこと

というものを採用する。このように考えれば、言語教育と関わりのない一般の人々も、現実の言語生活の場（教室外の世界）において、他者の能力や行動について（また、ヒトだけではなく、モノや、形のないコトガラについても）常に評価を行っている、ということになる。

そうした「教室外の世界」で行われている評価が、「教師内での評価」と異なるところは、多くの場合その判断が、「極めて恣意的かつ個人的な評価価値観に基づいて行われている」ということであろう（宇佐美 2008）。いわゆるオーソライズされた評価基準がないまま、各自自由に判断を行っているのだから、これは当然のことであろう。そのため、評価者が変われば、あるいは場面が変われば、同一の評価対象に対してもまったく異なる評価が下されてしまうことがあり得る。そしてそのことは、high-stake な評価では避けるべきことであるが、現実の言語生活の場における評価においてはごく当たり前で自然なことと言える。

2. 「評価」をめぐる新しい動き

そのような評価が行われている教室外の世界においては、「ある特定の評価価値観（例えば、「一般日本人の平均的な評価傾向」のようなもの）を想定し、その中で高い評価が得られるように学習を進める」ということにあまり意味はないだろう。

佐藤・熊谷(2010)は「社会文化的アプローチ」の視点に基づき、学習者を、あらかじめ定められたルールの上を進んでいく存在としてではなく、「実践の共同体の中で問題解決を図り、自己他者を評価しながら変化していく存在」ととらえる。そのうえで、変化の結果ではなく、変化していくプロセスを多面的に評価していくための方法論として、各種の「代替アセスメント (alternative assessment)」を紹介している。代替アセスメントには、1) 学習の結果では

なくプロセスに着目する，2) 周囲の人間を巻き込んだ協働的な活動を重視する，3) 教師からの評価ではなく，自己評価や，対等な関係にある者同士の評価（ピア評価）を重視する，という特徴があり，これはまさに，教室外で行われている評価を，教室内の活動にも取り入れていこうとする試みであるといえる。

こうした試みはもちろん有意義なものではあるが，日本社会（日本国内の社会だけでなく，海外における日本人社会も含む）の中で生活や仕事をしている学習者にとっては，教室内で過ごす時間より教室外で過ごす時間のほうがはるかに長いものと考えられる。教室外の世界において，周囲の人間とよりよい人間関係を作り，円滑な社会生活を送っていきけるようになるためには，まさに「教室外の世界での人間関係においてどのような相互評価が行われているのか」，「異なる評価価値観のぶつかり合いの中でひとはどう変わっていくのか」，ということをとらえていく試みが必要となるだろう。

3. 現実社会における相互評価のぶつかり合いの中で

上記の目的を達成するためには，理論的・実践的という二つの異なった側面からのアプローチが必要になると筆者は考える。

理論的アプローチとしては，まず 1) 現実の言語活動場面において評価のあり方の多様性の実態を虚心坦懐にとらえ，2) そこで得られた多様な評価の実態の中に何らかの類型を見つけ出すとともに，3) 評価プロセスをモデル化して示す，という研究が必要となるだろう。評価のあり方が人によって大きく違う，ということは当然のことであって，そのことを指摘するだけでは意味が薄い。そこから実のある提言を行っていくためには，多様性の中に何らかのシステムを見出していき，という試みが研究としては必要なのである（こうした考え方に基づく研究の例としては宇佐美・森・吉田 2009，宇佐美 2010 などが挙げられる）。

一方でこうした理論的な研究のほか，「異なる評価価値観がぶつかり合ったとき，その価値観のずれを乗り越えるためには具体的にどうすればよいか」「ずれを乗り越えることができた時，具体的には当事者の中で，どのような思考プロセスが行われているのか」ということを，具体的な言語生活におけるやりとりの事例に即し，実践的に考察を重ねていくということも必要である。さらに可能であれば，そうしたずれを乗り越えるための教育システムを開発し，提案していくことが必要であろう。教育システム開発においては，前述の「評価価値観の類型化・評価プロセスのモデル化」に関する研究が理論的な支柱となることが期待される。そして，上記のような手順によって得られる教育システムは，決して「外国人に対する日本語教育」という狭い枠の中に収まるものでなく，日本人に対する国語教育や，成人に対するコミュニケーション教育，ジョブトレーニングなども包摂した「生涯学習」の重要なテーマとして位置づけられるものとなるであろう。

そこで今回のパネルセッションでは，上記のうち後者の「実践的考察」を深めていくため，以下のようなことを行う。

- ・「評価価値観の多様性」が現れやすいと思われる場面として，「ビジネス場面」，「子育て場面（保育園等）」，「医療コミュニケーション場面」の3つを設定する（「ビジネス場面」「子育て場面」については特に日本人と外国人との接触場面を取り上げる）

- ・それぞれの場面について、そこで起こり得る「評価価値観のぶつかり合い」と「評価の調整」、
「評価の調整によって得られた意識・行動の変化」の実態を、実例に即して紹介するとともに、
その分析・考察を行う。
- ・「異なる評価価値観がぶつかり合ったとき、その価値観のずれを乗り越えるためにはどうすればよいか」「ずれを乗り越えることができた時、具体的には当事者の中で、どのような思考プロセスが行われているのか」ということについて、また、評価のずれを乗り越えるためにはどのような教育プログラムの開発が必要か、ということについて、フロアを交えたディスカッションを行う。

なお、このパネルで使う用語の定義を、以下にまとめておく。

評価：

対象について何らかの情報を収集し、それに対し、評価者の解釈を通して判断を行うこと

第一次評価：

対象に接し、最初に行われる評価（情報収集・解釈・判断）

第二次評価：

第一次評価において何らかの問題（例：違和感や不全感、不快感、「このままではうまくいかない」という見込み、等）が得られたとき、その問題を乗り越えるため、新たな情報を集めたり、情報の整理・再解釈を行ったりすることによって新たな判断を行うこと

評価者ビリーフ：

評価を構成する各要素（特に「解釈」の要素）に影響を与える、評価者のものの考え方

参考文献

- 宇佐美洋(2009)「学習者の日本語運用に対する、日常生活の中での評価：個人の「評価観」の問い直しのために必要なこと」『日本言語文化研究会論集』第4号，19-30.
(<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/files/ronshu2008/usami.pdf> からダウンロード可)
- 宇佐美洋(2010)「文章の評価観点に基づく評価者グルーピングの試み - 学習者が書いた日本語手紙文を対象として - 」『日本語教育』147号，145-156.
- 宇佐美洋・森篤嗣・吉田さち(2009)「外国人が書いた日本語手紙文」に対する日本人の評価態度の多様性-質的手法によるケーススタディー-」『社会言語科学』12(1)，122-134.
- 佐藤慎司・熊谷由理(2010)『アセスメントと日本語教育 - 新しい評価の理論と実践』くろしお出版